

小学生のいる家庭における 家族のコミュニケーションと住まい方の関係

正岡 さち*・中原 早紀**

Sachi MASAOKA , Saki NAKAHARA

The relations between family communication and way of dwelling of homes with primary school kids

要 旨

- (1) 父子間でのコミュニケーションは、母子間でのコミュニケーションに比べて少なかったが、親子のコミュニケーションの満足度に、より影響を与えていた。そのため、父子間のコミュニケーションを増やす工夫が必要であると考えられる。
- (2) 親子の会話の場はリビングが中心であり、よく話す親子ほどリビングでの会話が多いという傾向が認められた。リビングの重要性を理解し、家族のコミュニケーションの場として十分に機能するような工夫が必要であると言える。
- (3) 親子の積極的なかわいが求められている。このことを踏まえた上で、コミュニケーションのかたちに合わせて住まいの工夫の導入がより効果的であると考えられる。
- (4) 親子のコミュニケーションを重視した住まいの工夫は、導入している場合はその工夫に対する評価が高い傾向が見られ、実際に導入することによってその良さを実感されているということだと考えられる。このことから、親子のコミュニケーションを重視した住まいの工夫やその効果をさらに広く紹介していくことが必要であると言える。また、各々の工夫がどのような家族に適しているのか、詳細に検討していくことが課題であると考えられる。

【キーワード：家族のコミュニケーション、住まい方、住まいの工夫、リビング、親子の会話】

1. 緒言

従来、住まいには4つの役割があるとされている¹⁾。家族の生命や財産を守るシェルターの機能、休養の場、家族生活の場、生活活動の場～文化創造の拠点～である。家族生活の場としての住まいは、子どもを産み育てて行く場であり、その過程で家族のコミュニケーションや団らん²⁾の場として大きな役割を持っている。家族の団らんやコミュニケーションについて研究によると、住宅や住まい方を工夫することは、家族の団らんやコミュニケーションに貢献できると指摘されている^{2)～5)}。

しかし、近年では、生活の多様化や多忙化、核家族化、生活時間帯のずれなどによって、家族がそろって過ごす時間が減少していることが指摘されている。以前に比べて家族が一堂に集まる時間を十分に持てない家族が増えていることが述べられており、その理由としては親の長時間労働や子どもの塾通いが考えられる。一方で、コミュニケーションというものに対する意識や、求められるコミュニケーションのかたちも変化してきていると考えられる。このような現状を受けて、住まいにおいても家族のコミュニケーションがとりやすい工夫が求められるよ

うになってきた。

また、家族のコミュニケーションのかたちは各家庭によっても異なる。その要因はさまざまであり、子どもの年齢、生活や住まいに対する考え方、家族関係、その家庭のライフスタイルなどが深くかかわっている²⁾。そのため、それぞれの家族のコミュニケーションのかたちに合った住まいの工夫が必要である。

本研究では、小学生のいる家庭における親子のコミュニケーションの現状と希望を詳細に把握し、そのうえで、親子のコミュニケーションが十分に取れる、求められる住まいの在り方、住まいの工夫とその有効性を明らかにすることを目的とした。

2. 調査方法

調査方法は、アンケート留め置き自記法である。調査対象は、松江市内の小学校3校の家庭の保護者である。回答は最も子どもの様子を把握している保護者に回答を依頼した。小学校の選定においては、様々なタイプの住宅が存在する地域であることを考慮した。調査期間は2011年10月中旬から11月上旬、配布部数は1325部、有効回収部数は709部、回収率は53.5%、調査内容は、家

* 島根大学学術研究院教育学系

** 元米子幼稚園

庭での親子のコミュニケーションの様子、理想とするコミュニケーションのかたち、親子のコミュニケーションを重視した住まいの工夫に対する考えなどである。

本研究においては、「コミュニケーション」は基本的に会話を含むものとし、「あいさつ」「会話」「共有活動」の3つから成るものと定義した。

なお、クロス集計の結果は χ^2 検定を行い、有意差が認められた結果については、図表中に、5%未満を*、1%未満を**、0.1%未満を***で示した。なお、参考として、10%未満を(*)で表示した。

3. 結果及び考察

(1) 対象世帯の属性

対象世帯の属性を表1に示す。

回答世帯の約85%が父母と子どもがそろった世帯であった。調査票記入にあたって、回答可能な設問に限って回答してもらうよう、依頼状には記載した。

表1. 対象世帯の属性

家族構成	父母+子	父母+子+祖父母	父+子	父+子+祖父母	母+子	母+子+祖父母	不明
家族人数	2人	3人	4人	5人	6人以上	不明	
父親年齢	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	不明	
父親職業	会社員	公務員	団体職員	農林漁業	自営業	自由業	アルバイト
母親年齢	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	不明	
母親職業	会社員	公務員	団体職員	農林漁業	自営業	自由業	アルバイト
子ども人数	1人	2人	3人	4人	5人以上	不明	
長子年齢	6~9歳未満	9~11歳未満	11~13歳未満	13歳~16歳未満	16歳以上	不明	
末子年齢	6歳未満	6~9歳未満	9~11歳未満	11~13歳未満	不明		
小学生の学年(学年が最も上の子)	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	不明
小学生の性別(学年が最も上の子)	男	女	不明				

(2) 対象住宅の概要

調査対象者の居住する住戸の概要を表2に示す。

一戸建て住宅と集合住宅が約半数ずつであった。

(3) コミュニケーションの現状

まず、コミュニケーションの時間を尋ねた結果を図1に示す。

平日は、母と子のみのコミュニケーションの時間はばらつきがあるのに対して、父と子・父母と子でのコミュニケーションの時間は1時間未満ととても少ない家庭が

表2. 対象住戸の概要

住宅形式	一戸建て	集合住宅	不明				
所有形態	持家	賃貸	不明				
築年数	10年未満	10~20年未満	20~30年未満	30~40年未満	40~50年未満	50年以上	不明
居住年数	10年未満	10~20年未満	20~30年未満	30~40年未満	40~50年未満	50年以上	不明
階高	1階	2階	3階	その他	不明		
LDKタイプ	LDK一体型	L+DK型	LD+K型	L+D+K型	その他	不明	
LDK以外の室数	2LDK以下	3LDK	4LDK	5LDK	6LDK以上	不明	

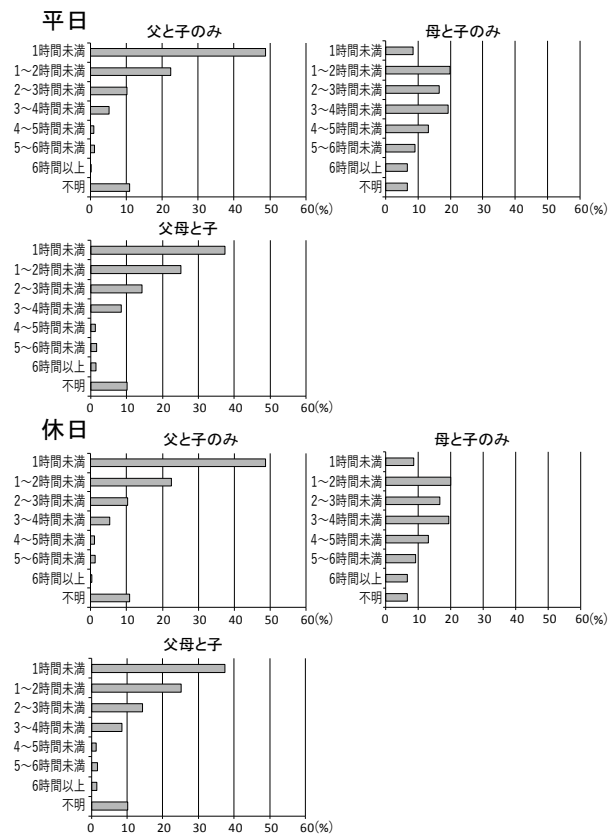


図1. 親子のコミュニケーションの時間

多くなっている。休日では、全体的に平日に比べてコミュニケーションの時間は増えている。中でも、父母と子のコミュニケーション時間は、平日は非常に少なかったのに対し、休日は「6時間以上」が多くなっている。平日には父と子で十分にコミュニケーションをとることができない分、休日に父母と子がそろってしっかりとコミュニケーションをとっている家庭が多いと考えられる。

次に、4つの日常のあいさつについて親子で交わす頻度を尋ねたものを図2に示す。いずれのあいさつも父子間よりも母子間の方が多く交わされている。これは、父と子では生活時間帯の違いからあいさつを交わす機会自体が少ないためと考えられ、父子間のコミュニケーションの時間が少なかったこととも関係があると考えられる。

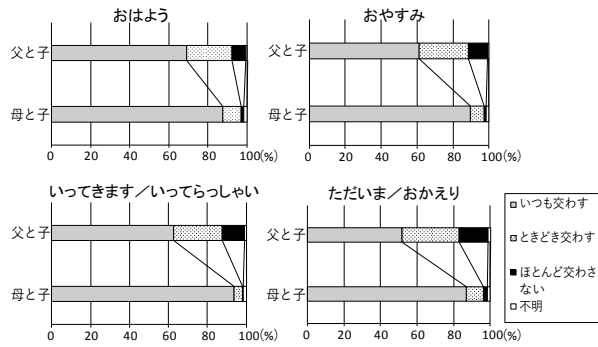


図2. 親子間のあいさつの頻度

親子の会話の程度を尋ねたものを図3に示す。コミュニケーションの時間やあいさつと同様に、父子間よりも母子間での会話がよく行われている結果となっており、感覚的にも、父と子よりも母と子の会話がよく行われていると感じられていた。父母と子の会話は、父と子の会話と似た傾向にあり、父母と子の会話は母と子の会話の中に父が参加するかどうかによるのではないかと考えられる。

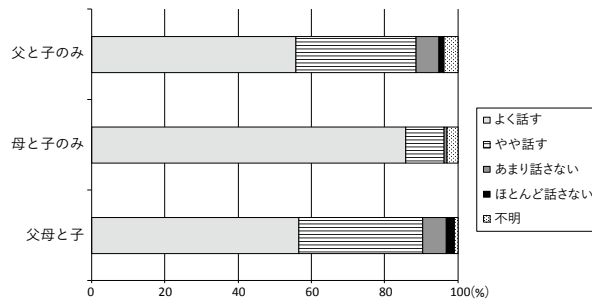


図3. 親子の会話の程度

(4) コミュニケーションをとる場所

親子の会話の程度と会話をよく行う場所の関連をみたものを図4に示す。親子の会話の程度で、「あまり話さない」「ほとんど話さない」という回答が少なかったため、2つの回答をまとめて「あまり話さない」グループとして分析を行った。

その結果、よく話す親子ほどリビングでの会話が多いという傾向がみられた。このことから、親子の会話を増やすには、リビングが家族のコミュニケーションの場として十分に機能していることが重要であると考えられる。

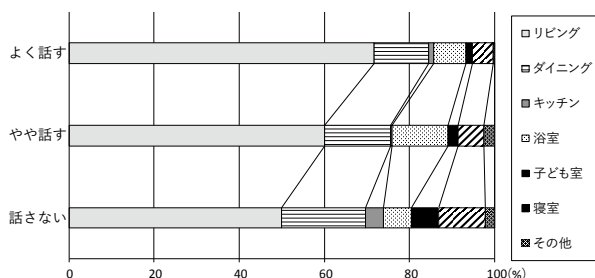


図4. 親子の会話の程度と会話の場所 (*)

親子でよく一緒にする活動について尋ねた結果は、父と子での活動は「ゲーム」や「スポーツ」など、一緒に遊んだり楽しんだりするものが多いのに対し、母と子での活動は「料理をする」「勉強をする」など、より日常生活に関わるものが多く見られた。また、父母と子での活動は「買い物に行く」「公園で遊ぶ」など、外出するものが多く、休日などに家族そろって出かけることでコミュニケーションをとっていると推測される。

(5) コミュニケーションの満足度

親子のコミュニケーションの時間に対する満足度を尋ねた結果を図5に示す。約6割が「満足」「やや満足」と答えていた。一方、「やや不満」「不満」は2割以下となっており、全体的にみると、コミュニケーションの時間には満足している割合が高いと言える。

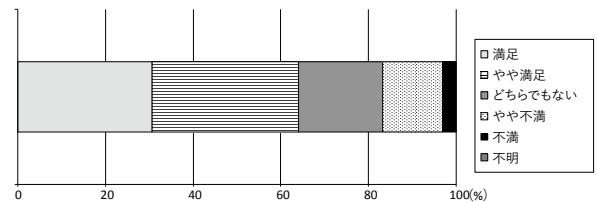


図5. 親子のコミュニケーション時間への満足度

コミュニケーション時間への満足度と実際のコミュニケーションの時間との関連を見た結果を図6に示す。長い時間のコミュニケーションをとっている人ほど満足と答える割合が多い傾向が見られた。特に、同じ「3時間以上」のコミュニケーションでも、「母と子のみ」よりも「父と子のみ」「父母と子」の場合の方が満足と答える人が多く、父と子での長い時間のコミュニケーションが、コミュニケーション時間への満足度をより高めていると考えられる。

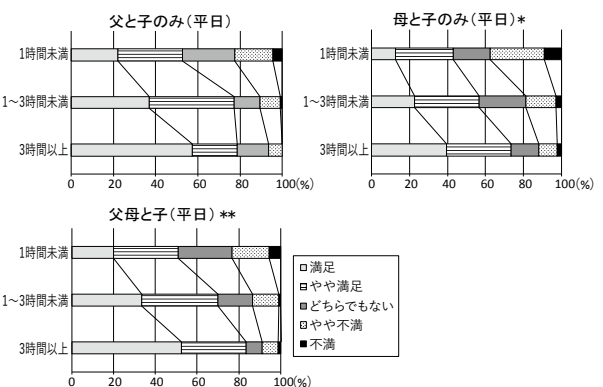


図6. コミュニケーション時間への満足度と実際のコミュニケーション時間の関係

親子のコミュニケーションの内容に対する満足度を尋ねた結果を図7に示す。「満足」の割合は時間に対する満足度よりも少なくなっているが、「やや満足」も合わせると約6割であり、時間と同様、コミュニケーション

の内容に満足している割合が高かった。

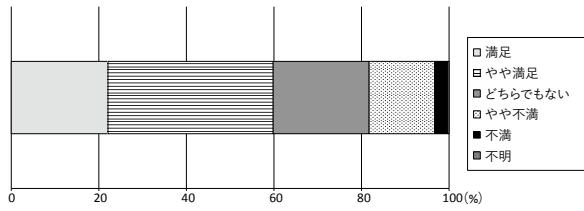


図7. 親子のコミュニケーション内容への満足度

コミュニケーション内容への満足度とコミュニケーションの現状との関連を見た結果を図8に示す。

まず、あいさつとの関連を見ると、「いつも交わす」とした人はコミュニケーション内容に満足していると答える割合が高くなっている。ここでは特に差が見られた「おやすみ」のあいさつのグラフをあげているが、他のあいさつでも同様の傾向が見られた。また、会話の程度との関連でも、「よく話す」とした人ほどコミュニケーション内容に満足していると答える割合が高くなっている。以上のことから、親子でのあいさつや会話が必要だと感じていると答える割合が高くなると考えられる。また、同じ「いつも交わす」「よく話す」でも、父子間の場合の方が母子間の場合よりも満足と答える割合が高いことから、父と子のあいさつや会話をするのが、コミュニケーション内容への満足度をより高めていると考えられる。

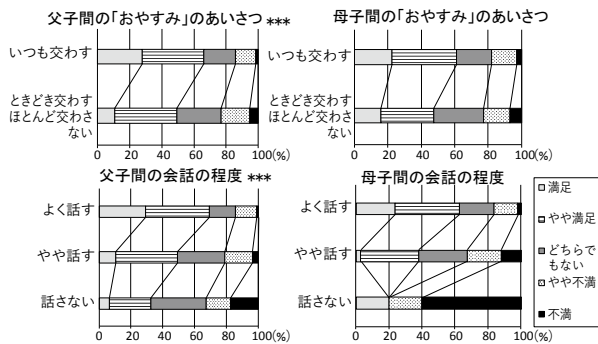


図8. コミュニケーション内容への満足度とコミュニケーションの現状との関係

次に、理想とするコミュニケーションのかたちについて尋ねたものを図9に示す。

「毎日短くても充実したコミュニケーションをとりたい

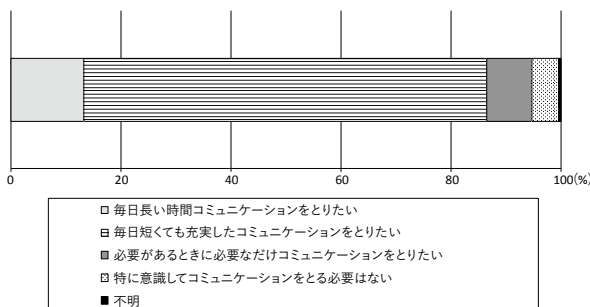


図9. 理想とするコミュニケーションの時間・かたち

い」が圧倒的に多かった。現代の忙しい日常生活の中では長時間ゆっくりとコミュニケーションをとることは難しいためと考えられる。

また、理想とするコミュニケーションの具体的な内容について尋ねた結果を図10に示す。

「ゆっくり会話したい」「あいさつをしっかり交わしたい」などが多く、積極的に言葉を交わすようなコミュニケーションを希望している傾向にあり、日常生活の中で活動を共有することや休日にてでかけることよりも、会話を重要視している様子が伺えた。

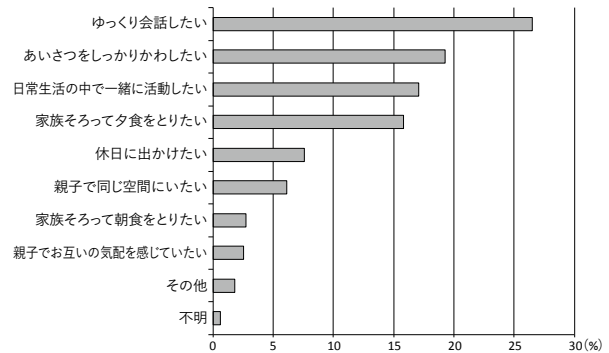


図10. 理想とするコミュニケーションの内容

図11に、コミュニケーションの内容の満足度別に見た時間の満足度の結果を示す。

内容に満足している程時間にも満足している結果となっていた。時間の満足度はコミュニケーションの実際の時間の長さに影響を受けていたことから、コミュニケーションの内容を満足させるためには、ある程度の時間の長さが必要ではないかと考えられる。理想とするコミュニケーションは、「短くても充実したコミュニケーション」の割合が圧倒的に多かったが、充実したコミュニケーションのためには、ある程度の時間の長さが必要と言える。

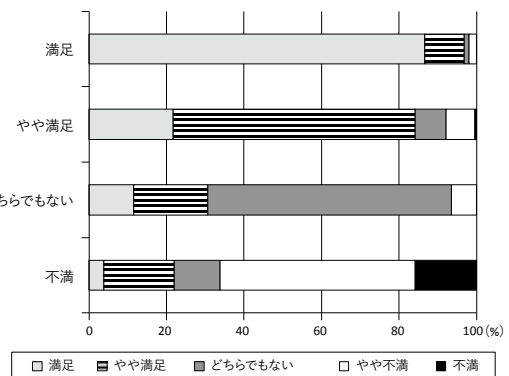


図11. コミュニケーションの内容の満足度別に見たコミュニケーションの時間の満足度 **

(6) コミュニケーションを重視した住まいの工夫の導入状況と評価

最後に、ハウスメーカーなどが提案している「親子のコミュニケーションを重視した住まいの工夫」にを参考に、具体的な住まいの工夫を23項目挙げ、その導入状況と評価について尋ねた。

まず、住まいの工夫の導入状況を尋ねた結果を図12に示す。

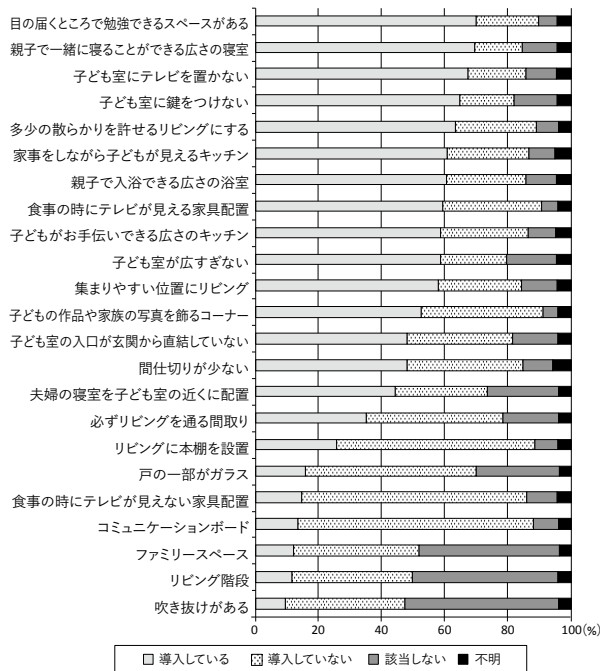


図12. コミュニケーションを促す住まいの工夫の導入状況

「目の届くところで勉強できるスペースがある」が最も多く導入されていた。次いで、「親子で一緒に就寝できる寝室」「子ども室にテレビを置かない」「子ども室に鍵をかけない」「多少の散らかりを許せるリビング」などが続いた。これは、住宅プランに関わらず取り入れることができるソフト的工夫であり、かつ、小学生時代の子どもの成長段階に合わせた工夫であると言え、そのため、取り入れている家庭が多いのではないかと考えられる。

一方、ハード面の工夫で多かったのは、「家事をしながら子どもが見えるキッチン」「子ども室が広すぎない」「集まりやすい位置にリビング」「子ども室の入り口が玄関から直結していない」等であった。小学生であるためリビングにいる時間が多いと考えられることによる工夫であり、さらに、子どもが成長した後、子ども室にこもりきにならないことを想定した工夫であると考えられる。

「吹き抜け」「リビング階段」「ファミリースペース」等は導入している家庭が少ないという結果であった。対象者の住戸の4割が賃貸であり、かつ、4割が集合住宅であったこと、これらの工夫は住宅の建築前からプランとして検討することが必要な工夫である上、2階建て以上でないことと導入が難しいこと、近年になって一般的になった比較的新しい工夫であることが理由であると考えられる。

次に、住まいの工夫に対する評価を訪ねた結果を図13に示す。ここでは、住まいの工夫を「とても良いと思う」を5点、「まったくよいと思わない」を1点として5段階で評価してもらい、その平均点を比較した。

全体的に見ると、「子どもがお手伝いできる広さのキッ

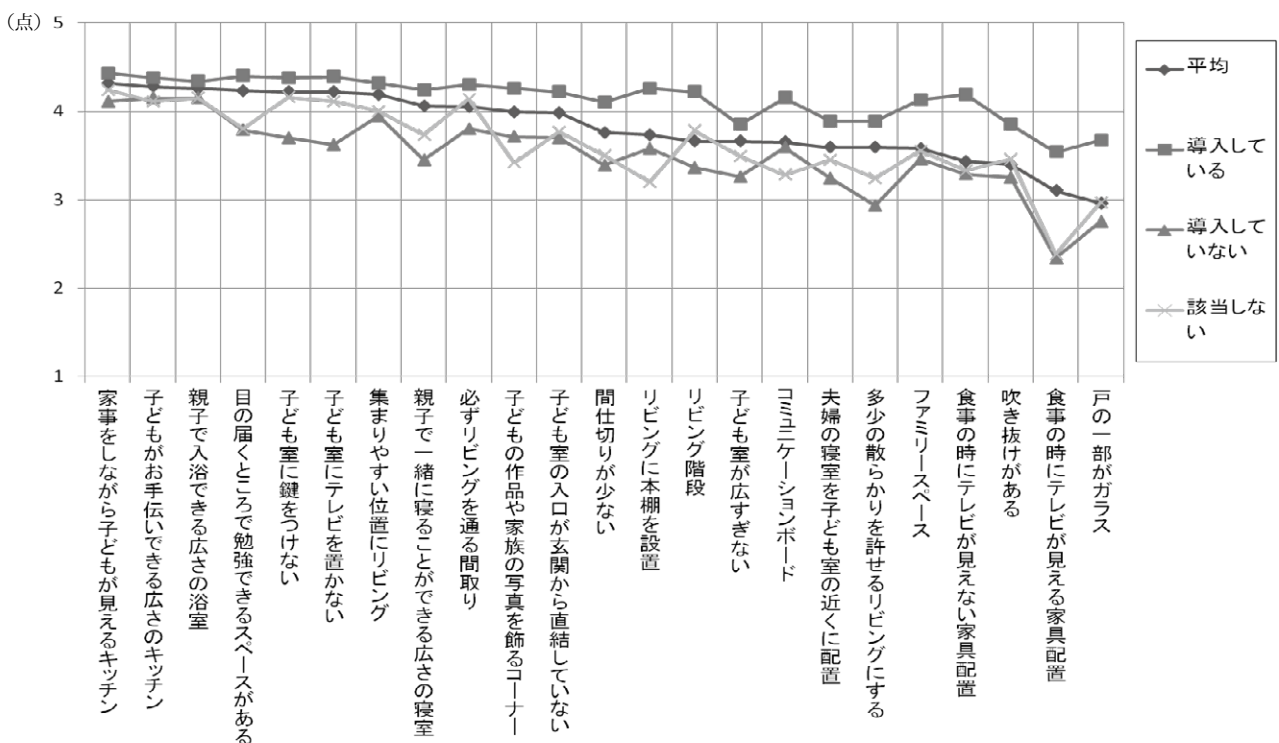


図13. 住まいの工夫の導入状況による住まいの工夫に対する評価

チン」「親子で入浴できる広さの浴室」などの「共有活動しやすい工夫」は評価が高かったのに対し、「吹き抜け」「戸の一部がガラス」などの「空間的なつながり」の工夫は評価がやや低くなった。親子の共有活動は理想とするコミュニケーションとして挙げる人が多かったが、一方で空間の共有のような会話の少ないコミュニケーションは少なかったことから、このような結果になっていると考えられる。

個々の住まいの工夫の導入状況とその工夫に対する考への関連を見ると、工夫を実際に導入している家庭ではその工夫に対する評価が高く、導入していない家庭では評価が低い傾向が見られた。例えば、「目の届くところで勉強できるスペースがある」では、この工夫を「導入している」人の評価は全体の平均よりも高く、この工夫を「導入していない」「該当しない」人の評価は全体の平均よりも低くなっている。親子のコミュニケーションを重視した住まいの工夫は実際に導入されることによってその良さが実感されているといえる。今後は、親子のコミュニケーションを重視した住まいの工夫やその効果を広く紹介していくことが必要であろう。

(7) まとめ

本研究の結果を大きく4つの点にまとめた。

まず、1つ目は、父子間のコミュニケーションの重要性である。母子間でのコミュニケーションに比べて父子間でのコミュニケーションは少ない傾向にあった。しかし、父子のコミュニケーションの時間が長い程、父子間で日常のあいさつがかわされる程、父と子の会話がよく行われる程、家族のコミュニケーションに対する満足度は高かった。つまり、父子間でのコミュニケーションは親子のコミュニケーションの満足度に、より影響を及ぼしているため、父子間のコミュニケーションを増やすための工夫の必要があると考えられる。

2つ目は、親子のコミュニケーションの場としてのリビングの重要性である。親子の会話の場はリビングが中心であり、よく話す親子ほどリビングでの会話が多いという傾向が見られた。このため、リビングが家族のコミュニケーションの場として十分に機能するような工夫が必要であると考えられる。

3つ目はコミュニケーションのかたちに合わせて住まいの工夫の導入である。「毎日短い時間でも充実したコミュニケーションをとりたい」と考える人が多く、日常生活の中で活動を共有することや休日にでかけることよりも、積極的に会話を交わすようなコミュニケーションを希望する人が多かった。しかし、一方で、時間と内容の満足度には関連性があり、充実したコミュニケーションにはある程度の時間の長さも必要であると考えられる。以上の点を踏まえて、家族が触れ合う時間がうまれやすい住まいの工夫の導入がより効果的であると考えられる。

4つ目は、住まいの工夫の導入の有無による評価の違いである。親子のコミュニケーションを重視した住まい

の工夫を導入している場合はその工夫に対する評価が高く、導入していない場合は評価が低い傾向が見られた。これは、住まいの工夫は実際に導入することによってその良さが実感されていると言える。住まいの工夫は、単に住宅を建てる前だけの工夫にとどまらず、「目の届くところで勉強するスペースをつくる」「親子が一緒に寝る寝室」「多少の散らかりを許せるリビングにする」等は、住まいの使い方によって解決できる工夫であり、今後は、親子のコミュニケーションを重視した住まいの使い方やその効果をさらに広く紹介していくことが必要であろう。また、「家事をしながら子どもが見えるキッチン」「集まりやすい位置にリビング」「必ずリビングを通る間取り」「リビング階段」等のハード面の工夫については、各々の工夫がどのような家族に適しているのか、詳細に検討していくことが課題であると考えられる。

4.要約

本研究によって得られた結果は下記の点である。

- (1) 母子間でのコミュニケーションに比べて父子間でのコミュニケーションは少なかったが、親子のコミュニケーションの満足度により影響を与えていた。そのため、父子間のコミュニケーションを増やすための工夫が必要であると考えられる。
- (2) 親子の会話の場はリビングが中心であり、よく話す親子ほどリビングでの会話が多いという傾向が認められた。このため、親子のコミュニケーションの場としてのリビングの重要性を理解し、家族のコミュニケーションの場として十分に機能するような工夫が必要であると言える。
- (3) コミュニケーションにおいて会話が重要と考えられていることから、親子の積極的なかわりが求められている。会話がうまれやすい住まいの工夫の導入がより効果的であると考えられる。
- (4) 親子のコミュニケーションを重視した住まいの工夫を導入している場合はその工夫に対する評価が高く、導入していない場合は評価が低い傾向が見られた。これは、住まいの工夫は実際に導入することによってその良さを実感されているということだと考えられる。

今後は、親子のコミュニケーションを重視した住まいの使い方の工夫やその効果をいかに紹介し、理解してもらうことが必要であると言える。また、ハード面の工夫については、各々の工夫がどのような家族に適しているのか、詳細に検討していくことが課題であると考えられる。

本研究の実施にあたり、調査にご協力頂いた小学校及び保護者の皆様に深く感謝致します。

5. 引用文献

- 1) 梁瀬度子、長沢由喜子、國嶋道子:「住環境科学」彰国社、pp.1-2 (1995)
- 2) 正岡さち、飯塚智子:「世代間コミュニケーションとしての家族の団らんに関する研究」、島根大学教育学部紀要第42巻別冊、pp.47-53 (2009)
- 3) 太田さち、河野安美、渡辺崇子、國嶋道子、梁瀬度子:「団らん空間に影響を及ぼす諸要因に関する研究(第2報)-主婦の意識を通してみた団らんの実態-」日本家政学会誌Vol.40、No.1、pp.69-73 (1989)
- 4) 四十万靖、渡邊朗子:「頭がいい子が育つ家」日経PB社 (2006)
- 5) 那須涼介、田中直人、植田早紀:「親子の子ども部屋に対する意識～子どもとのコミュニケーションが生まれる家庭環境に関する研究 その1～」日本建築学会大会学術講演梗概集 (東海)、pp.1181-1182 (2012)